

全知者と慈悲・無我見の修習

佐 藤 智 岳

1. 問題の所在

Tattvasaṃgrahapañjikā (TSP) 最終章では、全知者 (sarvajña) に関する議論が展開されている。

既に護山 2012 等で指摘されているように、TSP は二障 (煩惱障・所知障) を断じることによって全知者になると規定する¹⁾。これら二障のうち煩惱障は無我を知覚することで断じられる。一方、所知障を断じるためには、無我見を (1) 注意深く (2) 中断無く (3) 長期間に渡って修習する必要がある²⁾。ただし下記中に示されるように、声聞・独覚は所知障を断じるための無我見の修習を行わない。

TSP [1060, 18–22]: 目の当たりにすることは直接知覚である。何を [目の当たりにすることか]。無我を、と文脈上の話題から理解される。それ (目の当たりにすること) が持っている特別性とは、多数多様の手段で、長い時間でもって、全ての形象でもって、それ (無我見) やそれと対抗するもの (我見) に関する美質と過失とが究極的に明らかになる。同じ理由で、声聞など (声聞・独覚) が無我を見ても [彼らは] 全知者ではない。なぜなら [声聞などには] そのような別の種類の特別な修習がないので、所知障を断じないから [全知者ではない]。

声聞・独覚も煩惱障を断じる (無我を見る)。ただし彼らは長期間に渡る特別な無我見の修習を行わず、所知障を断じないため、全知者ではないとされる。

当該箇所に関しては、McClintock 2010 でも考察されている。しかしながら同研究は、TSP 当該箇所の背景となる *Pramāṇavārttika* 第 2 章 (PV II) の議論などを踏まえておらず、その考察は不十分である³⁾。

本稿は、同研究の考察で踏まえていない (1) 当該箇所以後続する TSP の記述、(2) さらに TSP の長期間の無我見の修習の背景となっている PV II, およびダルマキールティの後継者達の理解などを通して、このような修習が慈悲を動機としたものであり、「ブッダの慈悲」(教示) と関連したものであることを示す。

2. 後続する TSP の記述

まずは問題の記述に後続する記述から確認する。

TSP [1060,22–1061,3]: 論証式は「以下の通り」。

【遍充関係】 およそ (1) 注意深く (2) 中断無く (3) 長い時間という限定要素を有する修習、それは全て手のひらの上にある「かのような」把握対象が顕れつつあるところの認識という結果を有する。例えば恋わずらいする人に愛しい女の修習があるように。

【主題所属性】 そして「現に」慈悲ある者 (kāruṇika) には先述の三種の限定要素と結びついた、全ての形象でもっての全てのものの無我「見」の修習がある。

【証因分類】 以上は、自性因である。

上の論証式では、「慈悲ある者」が「長期間の無我見の修習」を行うことが示されている⁴⁾。この声聞・独覚と異なり、長期間の無我見の修習を行い全知者（ブッダ）となる「慈悲ある者」とは、菩薩である。

では、なぜ菩薩はこのような修習を行い、一方の声聞・独覚によっては実践されないのか。おそらくこの分岐点は、慈悲ある者 (kāruṇika) という語から示唆されるように、両者の慈悲の差であろう。そしてこの予想は「長期間の無我見の修習」の背景となっている PV II 136、およびこの修習に関するダルマキールティの後継者達の理解を通して、裏付けることができる。

3. 教示と無我見の修習

PV II 131cd–138ab では『プラマーナ・サムッチャヤ』帰敬偈の語句「教示者 (śāstr)」が説明される。その中の第136偈に、長期間の「手段」の修習が説かれる。

当該偈の前後の文脈を考慮すれば、この長期間の修習は、教示を目的とする「慈悲を有する者」(dayāvat) によって行われるものだと思える。そして PV II の当該箇所だけでは判然としないかもしれないが、「慈悲を有する者」(菩薩⁵⁾) によって修習される「手段」とは無我見のことである。PVII136に対して *Pramāṇavārttikapañjikā* (PVP) は、長期間修習されるものが無我見であることを明確に示し、さらにそれを教示と関連付けている。

PVP [D 56b6–57a3, P 64b5–65a2]: また、その無我見にも他者のために発動なさる方、彼が、長い時間、さらに多数多様なあり方で手段を修習「つまり」多種なあり方で修習なさる方である。[彼には] 無我見の美質とそれ（無我見）に敵対するもの（我見）の過失とが、残すこと無く明瞭になる。[なぜなら、それらを] 残りなく理解することがない限り、教示

[手段を行じる] 者性の成就を達成した者ではない [から]、したがって偉大なる人々による長い時間の修習が結果を持たないことはない (必ず持つ)。

論証式は [以下の通り]。

【遍充関係】あるものに関しての知者が、長い時間、多数多様なあり方で修習すれば、彼には、それ (あるもの) の美質とそれに敵対するものの過失とが明瞭になる。例えば、とある知者で、工巧業処 (*śilpakarmasthāna) に専念した者が [修習した場合の] ように、

【主題所属性】そして [現に] 解脱を求める彼が、無我見を長い時間、多数多様なあり方で修習している。

【証因分類】以上は、自性因である。

ここでは、長期間の無我見の修習が他者のため (parārtha) に行われるものであり、またその修習が教示を目的としていることも理解できる。

さらに上記 PVP では、先に確認した TSP の論証式と類似するものが登場している⁶⁾。ただしこの PVP の論証式では *sarvākārasarvagata* や *kāruṇika* といった表現は確認できない。

続く第137偈に対する注釈では、ブッダが声聞・独覚よりも優れていることが、長期間の無我見の修習と関連して示されている。さらにブッダが習気を断じているならば長期間の無我見の修習が行われているとし、ブッダによって他者に正しく教示することを目的とした修習が実践されていることを示す⁷⁾。

このような無我見の修習は、道の修習とも呼ばれる⁸⁾。また、この道の修習により、「残り (śeṣa)」が除去され、様々な手段を用いて巧みに四諦を教示できるようになる⁹⁾。ただし声聞・独覚は道の修習を行わないため、ブッダと異なり「残り (śeṣa)」が存在する¹⁰⁾。

他者に教示することを目的として無我見を長期間修習したブッダと異なり、声聞・独覚は、このような修習を行わない。つまり声聞・独覚は、他者に教示することを目的としないので、長期間の無我見の修習を實踐しないといえる¹¹⁾。このことは、サンスクリットテキストが参照可能な *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (PST) から支持できる。

PST には、先に確認した PVP と同様の趣旨のものが、より整理された形で提示されている¹²⁾。当該箇所では、長時間かけて慈悲 (*karuṇā*) を体得した者によって¹³⁾ 他者に教示するための修行が行われることを説く中で、先の PVP の論証式と類似したものが登場する。また当該箇所は、長期間の無我見の修習が世尊によって実践されたと述べ¹⁴⁾、手段の修習 (*upāyābhyāsa*) つまり無我見の長期間の修習による習気の断という点から、世尊が独覚などより優れていることを示

す。さらにこのような修習が、他者のため（parārtha）つまり教示を目的とした者によって行われるとも述べる。

PST は教示を目的として無我見の修習を実践した世尊と声聞・独覚との違いを示す。ここでも、教示を主眼としない声聞・独覚は、長期間の無我見の修習を行わないことが含意されている。

4. TS (P) 導入部の記述から

TSP は導入部で *Tattvasaṃgraha* (TS) 冒頭の6つの偈を注釈しつつ各章の概要を示す。

全知者に関する議論が展開される最終章の概要は、「世間の利益をなそうとして、多くの無数劫をかけて、偉大な慈悲を身に付けた者であり[そのような]語り手達の中で最上の者である彼（ブッダ）は縁起をお説きになった、かの全知者に（TS 5b-6c）」という記述を注釈しつつ説かれる。つまり TS(P) にとって、最終章の関心事が、全知者、そして慈悲とブッダの教示であったとも考えられる。

さらに TSP は最終章の概要を示すなかで、正しく教示する際に慈悲と認識の両者の必要性を述べる¹⁵⁾。TSP 最終章を理解する際、ブッダの全知に関しても、慈悲や教示（救済）との関係を考慮すべきであろう。

5. おわりに

TSP 最終章では長期間の無我見の修習が説かれる。この修習実践の有無により、所知障を断じること、さらに全知者となるか否かが決まる。この修習の実践者は「慈悲ある者（*kāruṇika*）」であり、声聞・独覚ではない。

PV II 136 では、教示者（*śāstr*）を説明する中で、長期間の「手段」の修習が説かれる。当該偈は、修習によって慈悲を身に付けた者が他者に教示するために修行するという文脈中に登場する。あくまで、慈悲にもとづき、教示を目的とした者によって「手段」の修習が行われるのである。そしてこの手段の修習とは、PVP・PST が明示するように無我見の修習である。

PVP・PST は、長期間の無我見の修習が教示を目的とした者である菩薩によって行われ、声聞・独覚によっては行われない、と考える。つまり慈悲を動機として無我見の修習が行われるのであり、この修習を実践するか否かは、菩薩と声聞・独覚との慈悲の差にあるといえる。

PVP・PST に登場する無我見の修習に関する論証式では、*kāruṇika* という語が

登場しない。ただし、このような修習が教示を目的とした菩薩によって行われるという、PVP などの理解を踏まえ、TSP は全知者論証式で *kāruṇika* という語を用いた、と考えることができる。

また TSP 冒頭部の記述にもとづけば、最終章において慈悲に関心がなかったとは考え難い。たしかに直接言及されていないかもしれないが、TSP は PV II や PVP などの理解を踏まえ、この長期間の無我見の修習が慈悲を動機としており、教示を目的としたものだと考えていた、といっていよい。

なお PVP・PST の無我見の修習の論証式では *sarvākārasarvagata* という語が確認できない。もちろん TSP との立場の違いも予想できるが、さらなる考察が必要であろう。

- 1) TSP [1052, 21–22]. 2) TSP [1052, 24–1053, 1]. 3) McClintock 2010: 251–252. とくに脚注 584 の記述には問題がある。 4) 前掲書 pp. 230–232 は *kāruṇika* という語に注目していない。 5) Cf. PVP [D 54b2–4, P 62a1–3]. 6) 現時点では、この PVP の論証式がラトナキールティ作 *Sarvajñasiddhi* の *upayuktasārvajña* 論証式の起源となるものだと考えられる。 7) PVP [D 57a3–7, P 65a2–7]. 8) Cf. PVP [D 87a3–5, P 100a6–8]. 9) Cf. 佐藤 2017: 440–442. 10) Cf. *Ibid.* なお同論文は *lam* を「道〔諦〕」と訳出するが誤りである。 11) Cf. PVP [D 120b2–3, P 140a1–3]. 12) PST [12,1–11]. 13) Cf. PST [9, 4–9]. 14) ただし修習を行ったのが世尊であり、行うのは菩薩である。 Cf. PST [3, 4–6]. 15) TSP [19, 22–20, 5].

〈略号〉

TSP: *Tattvasaṃgrahapañjikā. Tattvasaṃgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shrī Kamalashīla*. Ed. Swami Dwarikadas Shastri. 2vols. Buddha Bharati Series 1, 2. Varanasi: Bauddha Bharati, 1968. **PVII:** *Pramānavārttika*, Chapter II. See Vetter 1984. **PVP:** *Pramānavārttikapañjikā*. D no. 4217; P no. 5717. **PST:** *Pramānasamuccayaṭīkā. Jinendrabuddhi's Viśālamalavatī Pramānasamuccayaṭīkā, Chapter I*. Ed. Ernst Steinkellner, Helmut Krasser, and Horst Lasic. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2005.

〈参考文献〉

佐藤智岳 2017 『『タットヴァサングラハ・パンジカー』最終章における無余の知 (aśeṣajñāna) について』『印仏研』66(1): 439–443. 護山真也 2012 「全知者証明・輪廻の論証」『認識論と論理学』シリーズ大乘仏教9, 春秋社, 227–257. McClintock, Sara L. 2010. *Omniscience and the Rhetoric of Reason*. Boston: Wisdom Publication. Vetter, Tilmann. 1984. *Der Buddha und seine Lehre in Dharmakīrtis Pramānavārttika*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 12. Vienna: Arbeitskreis für Tibetologie und Buddhistische Studien Universität Wien.

〈キーワード〉 sarvajña, 慈悲, 無我見

(九州大学大学院)